



冠水した国道の脇で水に漬かった車  
=29日午後1時すぎ、加茂市下条

29日、県央地域には局地的な大雨が降り続いた。加茂市の加茂川や下条川、三条市の五十嵐川では水位が上がリ、民家や店舗に床上・床下浸水の被害が出た。道路も各地で冠水し、多くの車が立ち往生。幹線道路を中心に渋滞した。三条市では大島・栄地区を除く市内全域に避難勧告が出され、公共施設などに市民が避難。「あのとき以来だ」「堤防は大丈夫なのか」と、大きな被害をもたらした2004年の7・13水害に匹敵する大雨に不安そうな表情を浮かべた。

# 襲う豪雨 募る不安

三条市との境界にある繁華街でも雨脚が強まり、道路が冠水。水しぶきを上げながら走行する車。29日午前11時30分すぎ、燕市井土巻3



五十嵐川の水位上昇により、市内全域に避難勧告が発令。不安そうな表情で避難してくる人たち=29日午後4時すぎ、三条市南四日町1のソレイユ三条

# 「百選」の棚田無残

400年以上守ってきた日本の原風景が、たった3日間の豪雨で一変した。下田の山々を望む地に棚田が広がる三条市下田地区の北五百川集落。佐野誠五さん(62)は1日、あぜが決壊し土手が崩れ落ちた田んぼを見つめた。「これほどの被害は初めて。どう修復したらいいのか…。水路も壊れ、このままではイネが枯れる。来年の作付けすら心配だ。」



被害を受けた棚田で、くわを手にあぜを修復する佐野誠五さん。用水の復旧などで「行政の支援もお願いしたい」と話す1日、三条市北五百川

三条・下田

あぜ決壊 用水断たれ…

農家「このままでは全滅」

北五百川の棚田は1999年、農水省が「日本の棚田百選」に選定した。約280枚(9・5畝)の棚田は、30軒ほどの農家が代々受け継ぎ、耕作している。近年はその美しい風景を求めてカメラマンらが訪れるようになった。

佐野さんの棚田は14枚で75畝。そのうち、下流部の11枚が被害を受けた。至る所であぜが、ひび割れや決壊を起こした。ひどい箇所では高さ約5畧の土手が30畧ほどに渡って崩落した。

激しい雨が襲った29日午前。佐野さんは見る見る変わり果てる棚田の光景に目を疑った。「滝のように流れ落ちる水とともに、土手が崩れ落ちていった。しかし、見詰めるしかなかった。」

7年前の7・13水害でも一部で被害を受けたが、「40年以上棚田を見てきて、こんな姿は初めて

だ」と話した。

さらに深刻なのは水が断たれたことだ。一帯の棚田は湧き水を引いているが、上流の山が崩れ落ち、土砂が用水路を覆った。水源はほぼ寸断された。

稲が穂を付け始めたこの時期は水が一番大切だ。水源の復旧めとほつかず、糸のようにわずかに流れ出る清水に望みを失った。この状況が続けば全滅してしまうと佐野さん。晴れ間を見て手作業であぜの補修を始めた。

豪雨の被害を気に掛け、遠くは沖縄県の知り

合いからも応援の電話が届いた。「多くの人が気に掛けてくれ、励みになる。棚田を守らなければ、ネが伸びる棚田を見渡し、ここに住む意味がない。」佐野さんは青々としたイネが伸びる棚田を見渡し、